

# 琉球大学学術リポジトリ

近代日本の旧城下町における武家の庭の役割：  
柑橘栽培の近代化との関わりに注目して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2015-09-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花木, 宏直, Hanaki, Hironao メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/31935">http://hdl.handle.net/20.500.12000/31935</a>

# 近代日本の旧城下町における武家の庭の役割 —柑橘栽培の近代化との関わりに注目して—

花 木 宏 直

The Role of the Samurai's Garden in the Old Castle Town in Modern Japan  
—Focus on the Relation to the Modernization of Citrus Cultivation—

HANAKI Hironao

## I. 問題意識

近世や近代における城下町研究は、歴史地理学をはじめ、人文諸科学において膨大な研究蓄積がみられる<sup>1)</sup>。しかし、従来の城下町研究は、川名が指摘するように、近世における城下町の空間構造の特性や近代以降における空間構造の変容についての検討の比重が大きく、城下町の居住者の生活に注目した研究は少ない<sup>2)</sup>。このような課題に対し、城下町における盗難や興行等の発生した場所の特性や<sup>3)</sup>、城下町を舞台とした怪談といった口承文芸に注目し<sup>4)</sup>、城下町に居住する人々に空間認知を通じてみえる空間構造を明らかにしようとした研究もみられる。しかし、これらの研究も、あくまで城下町の空間構造の検討に主眼が置かれており、空間構造にとどまらない城下町の特性については十分検討されていない。

ところで、近世や近代における城下町の景観の特性の1つとして、緑地が多かったことが指摘されている。たとえば、近世の江戸は庭園都市といわれるほど緑地が多かったことが、外国人の執筆した訪問記を通じて判明している<sup>5)</sup>。また、江戸に限らず、近世には各地の城下町においても大名庭園の発達がみられ、武家や町人も邸内に庭<sup>6)</sup>をもちあわせていた<sup>7)</sup>。さらに、明治前期の旧城下町では、武士の転出により一時的ではあるが旧武家地の農地化がみられ<sup>8)</sup>、東京では旧武家地へ茶やクワといった商品作物の植付が推進される等<sup>9)</sup>、近世の時点より緑地の増加がみられた。

著者は、城下町にみられる緑地、とくに武家の

庭に注目することが、城下町に居住する人々の生活様式や、城下町が周辺地域の形成に果たした役割を検討する上で、重要な指標になると考える。庭には、さまざまな草木や花卉、蔬菜、果樹等の植物が栽培され、ニワトリや錦鯉等の動物が飼育されている。城下町に居住する人々は、植物に注目すると生け花等の観賞用や、仏花や供物等の儀礼用、日常のおかず等の食用をはじめ、趣味と実益を兼ねて利用してきた。この点と関わり、著者は城下町に居住する武士の妻女性が記した日記を分析し、さまざまな人々とのつきあいを通じて、庭にある果樹が歳暮や正月飾り、子どものおやつ、趣味である絵画の画題等、多面的な利用の実態を明らかにした<sup>10)</sup>。

また、武家の庭で栽培された植物は、趣味の範疇を超えて高度な知識や技術を生み出していた。近世後期から近代にかけて、欧米では世界各地へ赴いて有用植物や経済植物、庭園需要にあった植物を採取するプラントハンターが日本を訪問したが、彼らは日本における園芸文化の高度さに注目している<sup>11)</sup>。一方、近代日本においても、殖産興業政策の一環として農業の近代化が進められた。その際、日本のプラントハンターに相当する役割を果たした農務官僚等が、武家の庭で蓄積された知識や技術に注目し、活用を試行した可能性が推察される。

以上を踏まえ、本稿では、近代日本の旧城下町にある武家の庭に注目し、そこで栽培されていた植物の特性を明らかにするとともに、近代日本の地域形成に果たした役割を検討する。研究対象と

して、植物の中でもとくに柑橘に注目する。近代以降、明治政府の殖産興業政策や先覚者の活動により、蔬菜や果樹の外来種の導入が進み、各地に外来作物の主産地形成がみられた<sup>12)</sup>。柑橘についても、ネーブルオレンジ等の欧米産やポンカン等の中国・台湾産といった、さまざまな外来種が導入された。一方、夏橙や鳴門蜜柑をはじめ近世以前は注目されていなかった柑橘品種が日本でも発見され、近代以降主産地形成がみられた。そして、夏橙は旧城下町である萩（現、山口県萩市）の特産であることからわかるように、日本産の柑橘品種には従来城下町の武家の庭で栽培されていたものが多い。柑橘は、武家の庭で栽培された植物が、近代日本における農業の近代化に果たした役割を検討する上で有益な指標となりうる。

方法として、Ⅱ章では、近代における主な柑橘品種の特性や来歴について、武家の庭との関わりを意識して検討する。Ⅲ章では、Ⅱ章で明らかになった柑橘がどのように発見されていたのか、農務官僚の行った調査に注目し検討する。

## Ⅱ. 柑橘品種の発生と武家の庭

### (1) 明治期における主な柑橘品種の来歴

表1は、明治期に日本で発見、ないし海外より日本へ導入された柑橘品種をまとめたものである<sup>13)</sup>。表1より、明治期には尾張系温州や夏橙をはじめ日本の在来種から有益な品種の発見や、ネーブルオレンジ等の欧米産、金九年母や椋柑といった中国・台湾産の導入がみられた。発見者や導入者に注目すると、日本産については苗木商や柑橘栽培者の比率が高かった。一方、欧米産や中国・台湾産といった外来種については、士族や農務官僚、農事試験場技師の関与がみられた。

また、日本産の柑橘品種の発見地に注目すると、夏橙は明治前期に旧城下町萩の武家の庭で発見され、旧萩藩での士族授産を目的に栽培の普及が行われていた。伊予蜜柑についても、萩に隣接した東分村にて発見された。さらに、鳴門蜜柑は旧城下町洲本（現、兵庫県洲本市）の武家の庭、天狗蜜柑は麓集落である鹿児島県加治木村（現、鹿児島県始良市）の邸宅、三月蜜柑は旧城下町である鹿児島市の邸宅で発見された。一方、日向夏蜜柑

は村落部にある邸宅、安政柑は寺院の境内で発見されている。

つまり、明治期の日本では、欧米産や中国・台湾産といった外来種の導入だけでなく、日本における柑橘品種の発見も盛んにみられた。日本産の特性として、柑橘農家や柑橘園ではなく、旧城下町の武家の庭をはじめ個人の邸宅で発見されたものの比率が高かったことが注目される。

### (2) 鳴門蜜柑と武家の庭との関わり

次に、旧城下町の武家の庭で発見された日本産の柑橘品種の1つである鳴門蜜柑に注目し、発見された経緯を検討する。資料として、明治中期に鳴門蜜柑を淡路地方の産業振興に活用するため、地元有力者が鳴門蜜柑の特性や栽培方法をまとめた、『淡路鳴門蜜柑栽培要略』（以下、『要略』と略記）と『淡路鳴門蜜柑栽培録』（以下、『栽培録』と略記）の2つの近代農書を用いる<sup>14)</sup>。まず、鳴門蜜柑が淡路地方の産業振興に活用しようとした経緯について、『要略』の「緒言」には以下のように記されていた。

輓今殖産事業ヲ計画スルモノ必スヤ先ツ其事業ヲ他邦ニ求メ之レカ移植拡張ノ道ヲ講究スルニ於テ百方至ラサル所ナシ而メ時刻特産物ノ繁殖ヲ計リ栽培ニ改良ヲ加ヘ固有ノ富源ヲ疎通スルヨリ着手スルノ容易ナルヲ忘却セシモノ、如キハ何ソヤ時風ノ理論ニ傾向シテ実業ノ難易遲速ノ点ヲ顧ミサル嫌ヤ、能ハス蓋シ營利ノ秩序ヲ謬ルモノニシテ識者ノ採ラサル所ナリ自国在来物産ニアリシヤ一自ラ風土ニ適応スルノ天恵アル而巴ナラス婦女子ト雖モ其栽植培養ノ一斑ヲ耳目セサルハナシ若夫有力者ノ率先シテ少シク意ヲ其間ニ加フルアレハ其繁殖ヤ速ニシテ収利ヤ見且ツ之ヲ他国物産ノ転殖ヲ企図スル者ニ比スレハ労半ニシテ功之レニ倍蓰スルハ亦論ヲ俟タサルナク然リ而メ後力テ転殖ノ事ニ及ホスモ未タ遅カラサルナリ今我淡路国特有物産中前途目的アルモノニシテ着手ニ怠ルモノハ鳴門蜜柑ナリ鳴門蜜柑ハ往昔洲本一士人ノ邸内ニ特産シ爾来歲月ノ久シキ近傍士族邸内ニ蕃殖シテ已ニ我国特有物産ト成ルモ他村落ニ在テ之ヲ栽植スルモノ極メテ鮮シ

花木：近代日本の旧城下町における武家の庭の役割 一 柑橘栽培の近代化との関わりに注目して一

表1 明治期に発見・導入された柑橘品種

年次	発見地・導入地	発見者・導入者	属性	品種	経緯
明治 8(1875)	東京府内藤新宿町	高木三郎	アメリカ領事	レモン, オレンジ	勸農寮へ導入
明治 9(1876)	東京府内藤新宿町	池田有親	士族	シトロン, オレンジ	勸農寮へ導入
明治10(1877)	東京府三田四国町	三田育種場		スイートオレンジ	
明治12(1879)	愛知県中島郡千代田村	八木恋三郎	苗木商	尾張系温州	枝変りを発見
明治12(1879)	山口県阿武郡萩町	小幡高致	士族	夏橙	武家の庭より発見, 士族授産として栽培
明治13(1880)	和歌山県和歌山区	大江城平	和歌山県有田郡田殿村, 栽培者	三宝柑	和歌山山城より移植し栽培
明治15(1882)	和歌山県有田郡生石村	井瓦丹臣	画家	丹生系温州	柑橘問屋より購入した苗木より枝変りを発見
明治16(1883)	山口県阿武郡東分村	三好保徳	愛媛県温泉郡道後村, 栽培者	伊予蜜柑	訪問先の中村正路の柑橘園で発見し, 持ち帰り栽培
明治17(1884)	鹿児島県鹿児島区, 西之表村	西郷従道	鹿児島県鹿児島島町, 士族	イタリア産レモン, 中国産金九年母, イタリア産金九年母, プッシュオレンジ	鹿児島苗木場と大島支庁種子島出張所へ導入
明治20(1887)	山口県大島郡西方村	山本万之丞	栽培者	山本系温州	枝変りを発見
明治21(1888)	静岡県小笠郡大池村	高島甚三郎	栽培者	ネーブルオレンジ	明治19(1886)に北米へ柑橘販路拡張の調査を行い, 義弟の北米移民を介し導入
明治22(1889)	静岡県小笠郡大池村	高島甚三郎	栽培者	ネーブルオレンジ	明治21(1888)に導入したネーブルが腐敗したため再び導入, 知人に分与
明治23(1890)	和歌山県那賀郡安楽川村, 田中村	堀内仙右衛門, 堂本英之進	栽培者	ネーブルオレンジ	明治18(1885)年の柑橘北米輸出の際, 同郷出身の北米移民で貿易商を介し導入
明治23(1890)	宮崎県宮崎郡赤江村	田村利親	宮崎県農務課	日向夏	鹿児島県・宮崎県下における植物調査にて, 真方安太郎宅で発見
明治24(1891)	和歌山県那賀郡田中村	堂本英之進	栽培者	ネーブルオレンジ, その他3種	明治23(1890)年に導入したネーブルが枯死したため, 再び導入
明治24(1891)	東京府	玉利喜造	東京農科大学教授	ネーブルオレンジ	
明治24(1891)	鹿児島県姶良郡加治木村	田村利親	宮崎県農務課	天狗蜜柑	鹿児島県・宮崎県下における天狗蜜柑の原木調査により, 柚木繁宅で発見
明治24(1891)	鹿児島県鹿児島市山下町	田村利親	宮崎県農務課	三月蜜柑	鹿児島県・宮崎県下における植物調査にて, 有川矢九郎宅で発見
明治24(1891)	福岡県山門郡柳川町	立花寛治	伯爵, 立花家農事試験場経営	オレンジ	立花家農事試験場へ導入
明治29(1896)	鹿児島県鹿児島町	田村利親	鹿児島県農務課	支那甜橙, 椪柑, 蜜柑	拓殖務省の培養・柑橘取調のため台湾へ出張し, 台北県の柑橘栽培者を訪ね受領
明治30(1897)	鹿児島県鹿児島町	田村利親	鹿児島県農務課	支那甜橙, 椪柑	日本郵船会社香港支店副支配人に依頼し導入
明治30(1897)	三重県南牟婁郡有井村	港 谷蔵	栽培者	春光柑	和歌山県東牟婁郡新宮町より購入した温州苗木に混入したものを発見
明治30(1897)	広島県豊田郡大長村	秋光八郎, 木下慶造	栽培者	レモン	和歌山県那賀郡田中村より導入したネーブル苗木に混入していたものを発見
明治31(1898)	静岡県駿東郡熱海町	小松精一	士族	ジョッパオレンジ	養嗣子が米国出張より帰郷した際に持参
明治35(1902)	大分県北海部郡青江村	秋光八郎, 木下慶造	広島県豊田郡大長村, 栽培者	早生温州	視察先の川野仲次の柑橘園で発見し, 持ち帰り育成
明治35(1902)	静岡県庵原郡興津町	田村利親	農商務省農事試験場技師	ブラッドオレンジ	米国移民を介し導入
明治36(1903)	静岡県庵原郡興津町	田村利親	農商務省農事試験場技師	ハートスレート, ワシントンネーブルオレンジ, パーソンブラウン, ホモサッサ, ルビー, マルチースブラッド	米国の技師との間で, 日本産の無核文旦と苗木交換により導入
明治36(1903)	静岡県庵原郡興津町	田村利親	農商務省農事試験場技師	ジョッパオレンジ, バレンシアスレート, マルチースブラッドオレンジ, ワシントンネーブルオレンジ, ルビーブラッドオレンジ, トムソンズインブルーワシントンネーブルオレンジ, セントミケール	米国出張に赴いた官吏に依頼し, 米国にて紹介を受けた苗木商より導入
明治36(1903)	静岡県庵原郡興津町	農商務省農事試験場園芸部		ワシントンネーブル, トムソンネーブル, マルチースブラッド, ルビーブラッド, メディターニアンスイート, バレンシアスレート, ジョッパ, ブルーケーデフルール, ゼノア(レモン)	米国カリフォルニア州の苗木商より導入
明治37(1904)	静岡県田方郡西浦村	海瀬伊右衛門	栽培者	トムソンネーブルオレンジ, バレンシアスレート	同郷出身の北米移民を介し導入
明治41(1908)	静岡県庵原郡庵原村	西ヶ谷可吉	栽培者	ナバレンシア	庵原郡の技師を介し, 米国の苗木商より導入
明治前期	兵庫県津名郡洲本町	新聞岡文, 等	栽培者	鳴門蜜柑	武家の庭より発見
明治後期	広島県御調郡田原村	恩田鏡彌	農商務省農事試験場園芸部長	安政柑	訪問先の浄土寺境内で発見
明治期	鹿児島県鹿児島市	鹿児島県農事試験場		ロシアンオレンジ	

注) 空欄は記載のないことを示す

資料: 塚口編(1959), 村上(1966), 果樹農業発達史編集委員会編(1967)等をもとに作成。

この記述から、『要略』には、外来種の導入といった海外からの技術移転による産業振興への反動として、地域の中で従来みすごされていたが有益な知識や技術を発見し、産業振興に活用したいという意識がみだせる。そして、旧城下町洲本にある武家の邸内のみで栽培され、村落ではほとんど栽培されていなかった鳴門蜜柑が、淡路地方にお

ける産業振興に貢献しうる作物として期待された。なお、『栽培録』の「自叙」には、鳴門蜜柑の利用の多様さや貯蔵に適し販路の広いこと等、鳴門蜜柑の経済的な有益性について記されるのみであった。次に、鳴門蜜柑の来歴の詳細について、『要略』の「鳴門蜜柑ノ伝」をもとに検討する。

此柑ハ初メ蜂須賀家ノ臣陶山與一右衛門長之ナルモノアリ五世ノ祖備前国宇喜多秀家ニ仕ヘ元和以降故アリ淡路国ニ移リ蜂須賀家ニ仕ヘ騎馬士ト為リ世々三百石ヲ食ミ洲本下原町ノ邸ニ住ム長之少シテ頗ル草木ヲ愛シ生花ニ長ズ一日唐橙ヲ食ス味甚佳ナリ蓋シ当時地方ニ珍トスル所ニ依ル乎親カラ其核子ヲ採リ邸内ニ播種スル一樹ノ發生スルヲ得愛養之ヲ久シクシ大樹トナルニ及テ実ヲ結フ其形状稍前年ノ橙実ニ肖ラレトモ風味ノゴトキハ一種特別ノモノナリシカ後数十年夏日一大菓ノ樹間ニ存スルヲ見ル即去年ノ遺実ナリ採テ之ヲ食ス風味頗ル超絶挙テ品評ス可カラス長之喜テ益此樹ヲ秘籠ス長之ノ母備中国松山ノ城主水谷出羽守ノ家老水谷太郎左衛門ノ女ナリ太郎左衛門亦有故淡路ニ移リテ洲本城ノ山下上物部村ニ住ス後裔今水本（※水谷の誤記カ、筆者補注）万次郎ト称ス長之或時摂津川辺郡中筋村ノ植木屋某カ来ルニ際シ母ノ故ヲ以テ秘籠スル所ノ柑枝ヲ剪リ水谷氏ノ邸内ニ自生スル所ノ回青橙ヲ砧トシ接貼セシム実ヲ結ヘハ即チ形チ全ク同クシテ味弥々秀ツルヲ以テ両家ノ珍菓トナシ世々之ヲ愛セリ（中略）

接種蕃殖ノ年度ハ確カニ推究ニ由ナシト雖モ植木屋嘉右衛門カ初テ接種セシヲ以テ第二ノ蕃植エナルヘシトス即チ陶山氏ノ繼植ニ係ルモノヲ以テ推セハ凡宝曆明和ノ間ナルヘシ昔時我淡路ノ両郡ニ植木屋職ハ唯此嘉右衛門アルノミ津名郡ニハ文政十年ノ頃洲本魚棚町泉屋定吉ナルモノ（今ノ物部村紀田定吉ノ先）初メテ植樹營業ヲ開クヲ以テ稍当地方ニ蕃殖スルハ概ネ此定吉ノ接種スル所ニ係レリ然ルニ本柑ハ洲本ノ地ニ産スルモノ最モ美味ニシテ他ノ地ニ植ユルモノハ多クハ数等ヲ降ル蓋シ撰地ト肥培ノ如何ニ因ルカ且翌年盛夏マテ樹頭ニ蓄ヘテ其美味ヲ賞美スヘキニ従来多クハ之ヲ解セサルト販路ニ意ヲ用イサルト培養宜ヲ得サル等ノ原因ヨリ近年マテ充分蕃殖セサリシハ頗ル遺憾ト謂フヘシ

この記述によれば、蜂須賀家の家臣である陶山長之という者がおり、洲本にある下原町に居住し、園芸を趣味としていた。ある時、陶山が唐橙を食して興味をもち、種子を採取して邸内の庭に植えて栽培したところ、唐橙より風味のよい果実を得

ることができた。そこで、長之の邸宅で栽培するとともに、長之の母方の生家の末裔であり、洲本付近にある上物部村に居住する水谷氏にも接木させ、両家のみで栽培していた。近世後期、洲本に専門の植木職人が成立し、鳴門蜜柑が淡路地方各地へ接木されていった。ただし、「緒言」によれば、『要略』の記された明治中期において鳴門蜜柑がおおよそ旧城下町洲本で栽培されていたことを踏まえると、接木による鳴門蜜柑の栽培の普及は洲本周辺にとどまっていたと推察される。

ここで、陶山や水谷の居住地に注目すると、陶山が居住していたとされる下原町という地名は洲本にみられない。そこで、武家地にある類似した地名を検討した結果<sup>15)</sup>、下原町は下屋敷町（現、洲本市本町5丁目、山手3丁目付近）の誤記と推察した。図1は、下屋敷町や上物部村の位置を示したものである。図1より、下屋敷町は洲本城の山麓にある武家地であり、上物部村も洲本より続く宅地となっていて、いずれでも農業地域ではないことがわかる。

さらに、鳴門蜜柑という名称の由来については、長之の末裔である長知が、文政末年に蜂須賀家14代藩主齋昌に献上し、齋昌より鳴門という名称をつけられたといい伝えられていたことが、以下の記述にみられる。

斯ノ柑ノ名ハ文政ノ末年（年月欠ク）蜂須賀家十四代齋昌氏（法号峻陵院）ノ命ズル処ニ係ル初メ陶山家七代與一右衛門長知ナル者目付役在勤中盛夏ニ方リテ此菓実ヲ藩主ニ献ス藩主齋昌氏大ニ之ヲ賞美シ是天下無比ノ物ナリ徒ニ無名ニ付シ去ルヘカラスト命スルニ鳴門ヲ以テス蓋シ鳴門峽ハ氏カ所領ノ地ニ属シ海内無比ノ名勝ナルニ因ルト云フ爾来此柑ヲ呼フモノ蜜柑若クハ橘ノ名ヲ付帯セスシテ単ニ鳴門ト称ス土俗呼フ所今尚然リ

以上を踏まえ、鳴門蜜柑は、洲本に居住する武士が、邸内の庭で行っていた趣味的な園芸の一環として、偶然興味をもった唐橙を栽培した結果、偶発的に得られた品種であった。また、品種名に注目すると、藩主への献上に伴い藩主が命名したといういい伝えにみえるように、鳴門蜜柑があく

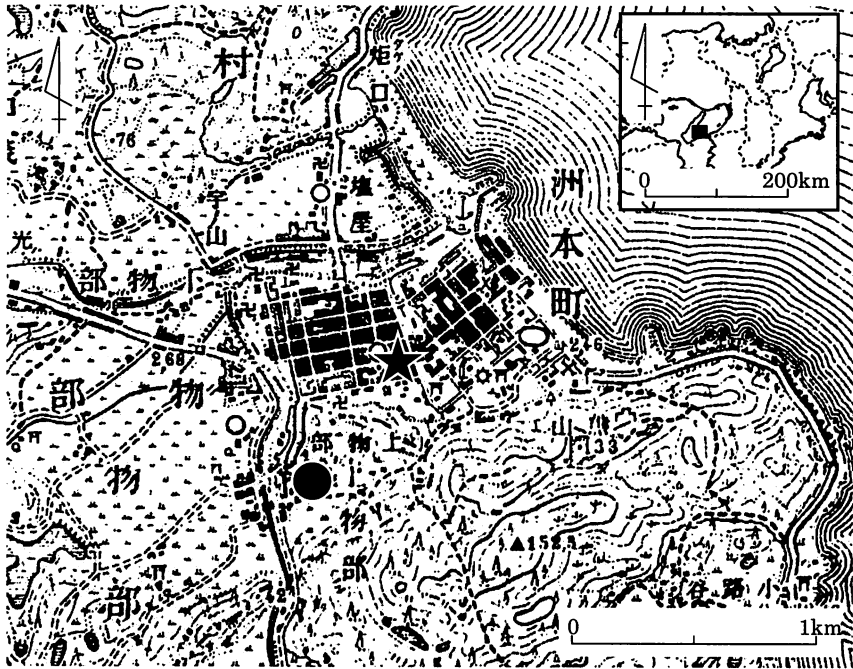


図1 洲本の概要 注) ★は下屋敷町, ●は上物部村を示す。

資料：1/50,000 「洲本」「由良町」(明治29(1886)年)をもとに作成。

まで武士の趣味や観賞の一環として利用されていたことが裏付けられる。

### Ⅲ. 柑橘品種の発見と武家の庭 — 田村利親の調査旅行に注目して —

#### (1) 田村利親の経歴

続いて、武家の庭においてどのように柑橘品種が発見されたのか、調査の詳細について検討する。事例として、明治期の農務官僚である田村利親による、柑橘新品種の調査旅行に注目する。田村利親は、嘉永末年から安政初年頃(生年不詳)に高知県で生まれ、宮崎県農務課や鹿児島県農務課、農商務省農事試験場園芸部勤務等を歴任した<sup>16)</sup>。表1にみえるように、田村は宮崎県に勤務していた時期には宮崎県や鹿児島県にてさまざまな柑橘品種を発見し、鹿児島県に勤務していた時期には台湾産、農商務省農事試験場園芸部に勤務していた時には欧米産の柑橘品種を日本へ盛んに導入した。本稿では、田村が宮崎県や鹿児島県で行った調査旅行に注目し、静岡県の柑橘栽培者や柑橘商の有志が明治36(1903)年に結成した日本柑橘

会の機関誌である『柑橘』<sup>17)</sup>に掲載された田村自身の執筆した報告をもとに検討する。

#### (2) 天狗蜜柑

まず、田村が明治19(1886)年に開始した天狗蜜柑の調査について、田村が記した「天狗蜜柑の説」を用いて検討する<sup>18)</sup>。はじめに、田村が天狗蜜柑に注目した経緯について、以下のように記されていた。

抑も天狗蜜柑と云ふ柑橘類のあることが余の耳朵に触れましたのは実に明治十九年九月下旬のことでして当時元老院議官田中芳男先生は日向の国宮崎に来られまして種々海陸の物産を調査されたことがありました其時余は職を宮崎県に奉し農商課に勤務を致して居りました干時岩山知事は田中先生が県下を巡廻されるからと云ふて余に其随行を命せられました余は田中議官に随従して殆んど三十余日の間日向の山川を跋涉し目に視耳に触れたるものは大概其の調査を遂げて八月下旬に鹿児島県曾於郡襲山郷霧島山の麓で田中技官と御別れを致しその先きは同勤の

木佐貫重節氏が余に代わって先生に随行し（中略）木佐貫氏は一日余に襲山郷から加治木を経て鹿児島市に至るまで田中先生か取調べられた海陸物産の話をして致しました話の中に此度田中先生か加治木で天狗蜜柑を取調べられたが尚青色で充分なことが分らなかつたとのことがありました是れが余か天狗蜜柑と云ふものがあつたことを聞いた初めであつたのです

明治 19 年、宮崎県農商課に勤務していた田村は、当時宮崎県知事であった岩山敬義の命により、元老院議員であった田中芳男が宮崎県や鹿児島県で行った物産調査に同行し宮崎県内を回った。そして、田村は途中で同僚と職務を交代したが、交代後に田中が鹿児島県の加治木で天狗蜜柑を調査したという話を聞き、田村は天狗蜜柑の存在を知った。

ここで、田中芳男の経歴に注目すると、天保 9 (1838) 年に飯田藩（現、長野県飯田市）の武家で生まれ、名古屋で蘭学等を学び、近代以降は博物学者として植物や動物、鉱物等さまざまな物産の調査を行った<sup>19)</sup>。『田中芳男伝』によれば、明治 20 (1887) 年 9 月に田中は宮崎県の高千穂や霧島、鹿児島県の大隅半島や桜島等を回り、天然稻の有無の調査や、霧島にて硫黄孔や高山植物の調査、垂水にて陶器や石器の採取、薩摩地方にて竹類より薬種となる天竹黄の発見等を行っている<sup>20)</sup>。田村が同行した田中の調査とは、『田中芳男伝』において明治 20 年に行ったとされる調査は明治 19 年の誤記であるとみられることから、この調査を示していると推察される。一方、宮崎県では田辺輝実が知事に就任していた明治 17 (1884) 年頃より、殖産興業政策に力を入れていた<sup>21)</sup>。また、田村に田中の調査への同行を命じた岩山は、田辺の後任で宮崎県知事となったが、内務省勸農寮や元老院議員を歴任し、田中とも元同僚という関係にあり、勸農政策に積極的な志向をもっていた<sup>22)</sup>。

其後二回鹿児島県に出張しまして桜島や山川や又は垂水等の各地に就て天狗蜜柑の所在を尋ねましたけれども当時尚其の種類の稀有あるものと見へまして大概其果実の名称さへ知るものか

なかつた程の有様ですから遺憾ながら其真偽を質することが出来ませなんだ然るに明治二十四年三月十三日三たび鹿児島に赴き其翌十四日始良郡加治木村に至り鑄物師森山正助氏に依つて天狗蜜柑の搜索をいたしました此日は森山氏の指導によりまして従来果樹の栽培に熱心なるもの十四五軒を訪問しましたが苗木は勿論其果実を結ぶへき程の樹を栽培したるものもありません所から遂に全村反土と云ふ処に行きまして柚木繁と云ふ人を訪問し漸く天狗蜜柑の由来を聞くことを得たのであります之が天狗蜜柑の元祖でした

天狗蜜柑に注目した田中は、その後数回鹿児島県にて調査を行ったが、天狗蜜柑を発見できなかった。その際、調査先として、桜島や山川（現、鹿児島県指宿市）、垂水（現、鹿児島県垂水市）等を訪問している点は興味深い。これらの地域を選んだ理由として、田村は田中が加治木で天狗蜜柑を発見したと知っていることや、調査の目的について「出張」と記されていることから、公務として赴いた先々で時間の余った際に調査を行っていたとみられる。ただし、桜島は鹿児島県有数の柑橘産地であることや、山川は南薩地方有数の港湾都市、垂水は鹿屋に次ぐ大隅半島有数の町場であることを踏まえ、田村は柑橘産地や、柑橘をはじめさまざまな情報が集積しやすい町場を選択した可能性も推察される。

そして、明治 24 (1891) 年に、田村は 3 度目の調査にて、加治木村を訪問した。その際、鑄物師である森山正助を案内人に選択した点も興味深い。加治木村では近世以前より日用品や下級武士の副業による農具をはじめ鑄造業が盛んであり、森山正助は加治木村にある鑄造所の 1 つである森山鉄工所の鑄物師であった<sup>23)</sup>。田村が森山を選択した理由は不明であるが、この人物が偶然地域の情報に詳しくあったことや、つての存在が推察される。そして、森山と共に十数戸を訪問し、最終的に反土地区に居住する柚木繁家の邸内にて天狗蜜柑の原木を発見した（図 2）。柚木の詳細な経歴や居住地は不明であるが、明治 6 (1873) 年の西南戦争において加治木出身者により結成された六番大隊八番小隊の一員として出征していること

から、もと武士であった可能性が高い<sup>24)</sup>。また、柚木家のあったとされる反土地区は、農村や町場ではなく、加治木城跡の北部に隣接する麓集落であった。つまり、天狗蜜柑の原木は、麓集落にある武家の庭に発生していた。

さらに、「天狗蜜柑の説」には、天狗蜜柑の来歴について、下記の2つの説が紹介されていた。

此の天狗蜜柑は曾て柚木氏の祖母某か一日文旦(内紫)の実を得ました処で其外形頗る美麗であつたのみならず其瓢肉亦赤色甘味であつたから其蕃殖を図らう為めに種子若干を取り之を家傍らの畦圃の中に下し置きましたるに日を経て発芽せるもの数本其内の一株は年を経て結果しました其果実は全く母樹文旦と其性質を異にし外皮赤色美麗肌理細微殆んど天壤の違ひでしたから一種特異の奇品と称し名を唐橙と命しましたそうです

天狗蜜柑と云ふ名を命しました原因は何におりてかと尋ねて見ますとこれには面白い伝説がありますそれは加治木の西北に方り蛇王嶽と云ふ高さ雲に聳ゆる程の峻山かある人跡の稀なる処でありまするが人或曾て此の山の頂上に攀ち上りまするとふと森然たる草木の間に柑類の幼樹かあり青々として成長せるを認めましたから丁寧に抜き取り携へ帰つて之を庭園の前に栽培し置きますると年を経て赤色豊美実一種無比の美果を結びました此の人跡稀な峻峰に柑橘の発生したは誠に怪むべきことである多分は天人の食膳に供したるもの、種子か落ちて発芽したるものであろうとの想像で是から名を天狗蜜柑と称へたと云ひまする

1つは、柚木の祖母が育成した内紫の偶然実生により得た品種を、柚木家付近にある畦畔にて育成したというものである。いま1つは、「蛇王嶽」(じゃおうだけカ)という「奥山」で発見した柑橘の枝をもち帰り庭で栽培したという内容である。後者について、「蛇王嶽」という山は加治木村の北西には存在せず、加治木村の北東には「蛇王嶽」と音の類似した「蔵王嶽」(じおだけ、ざおうだけ)という山がある。図2からわかるよう

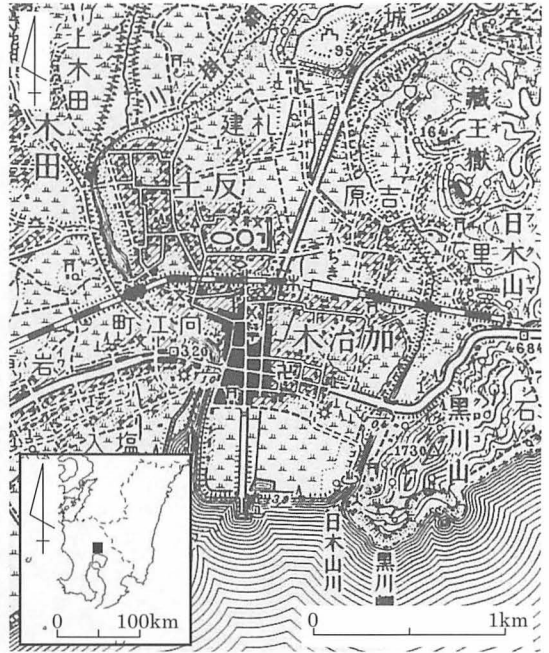


図2 加治木の概要

資料：1/50,000「加治木」(明治35(1902)年)をもとに作成。

に、この山は急傾斜をもつが、奥山ではない。ただし、これらの説話から、少なくとも、天狗蜜柑は山野に自生していた果樹を持ち帰り、武家の庭で趣味的な園芸の一環とした栽培されたと推察される。

なお、3回目の調査では、天狗蜜柑の原木を発見したものの、収穫期ではなかったため、熟した果実をみるができなかった。その後、田村は加治木での調査を継続して行っていた。

天狗蜜柑の発見者は柚木氏なることを確かめまして実に積年の疑団初めて氷解しましたけれど尚其結果の如何を実見したひものと思ひまして森山正助と共に新納平十郎氏を訪問しましたなれども全人は折悪く不在でしたから更に二三の商家を叩き遂に曾木彦五郎氏の邸内に栽培したものがあつたとのことを聞知しました因て直に全氏の家を尋て備さに其来意を告げました処が全氏は大に喜ひまして邸前の柑樹を指して彼れか天狗蜜柑と云はれましたそこで余は其樹に立寄り一見しまするに已に三四十も経たるものかの様に見受けました尚全人の語る処によれば



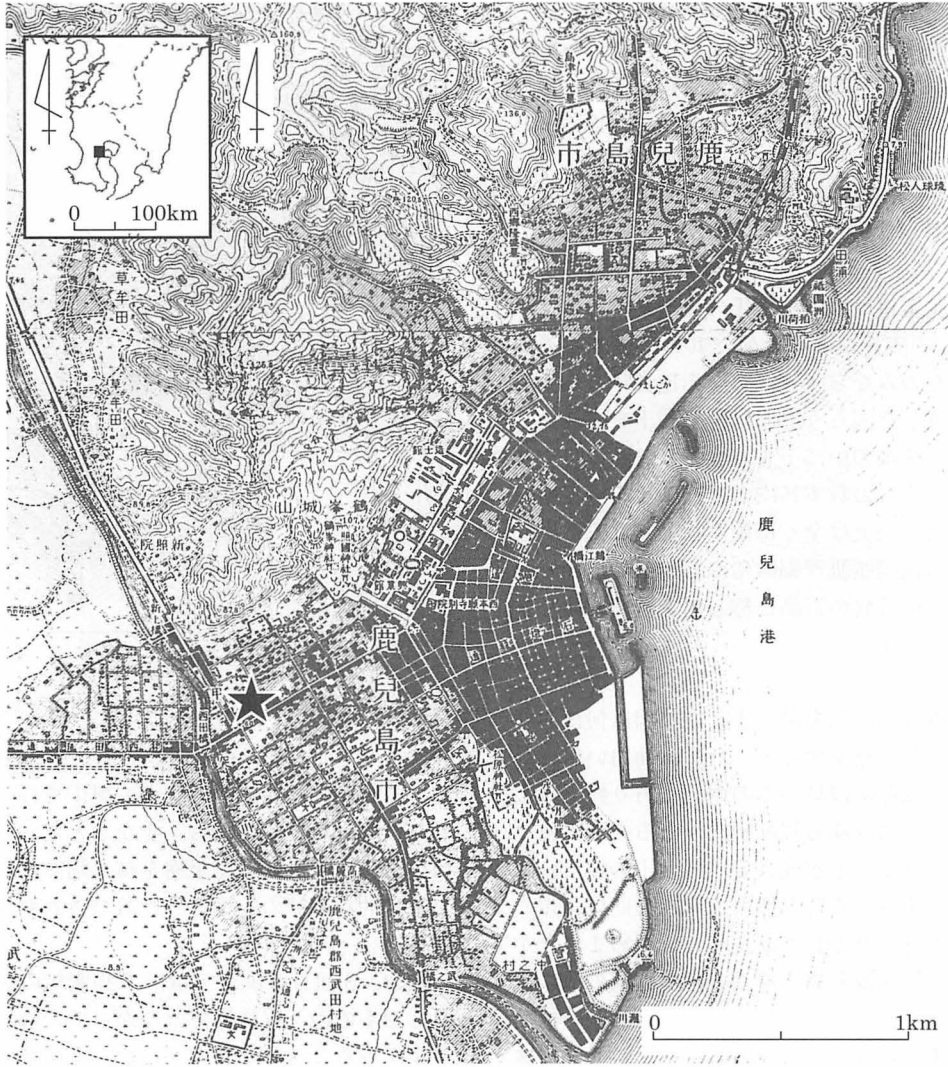


図3 鹿兒島の概要 注) ★は有川矢九郎宅を示す。

資料：1/25,000「鹿兒島」「伊敷」(明治35(1902)年)をもとに作成。

此の木は原と柚木氏より分栽したるものでありますと

調査では、森山に再び案内人を依頼し、新納平十郎や曾木彦五郎等の邸宅を訪問した。これらの人物について、本文には「二三の商家」と記されている。しかし、新納の詳細な経歴や居住地は不明であるが、加治木島津藩家老の新納家の分家とみられ、西南戦争に六番大隊一番小隊の一員として出征していた<sup>25)</sup>。また、曾木の詳細な経歴や居住地も不明ではあるが、新納家と同じく加

治木島津藩家老の曾木家の分家とみられ、明治元(1868)年の戊辰戦争には砲手、西南戦争には六番大隊二番小隊の一員として出征していた<sup>26)</sup>。つまり、新納も曾木も商家ではなく、反土地区に居住するもと武士であり、武家の庭に天狗蜜柑が栽培されていた様子がうかがえる。なお、この調査においても、天狗蜜柑の果実をみることはできず、田村は後日郵送にて果実を獲得した。

### (3) 三月蜜柑

次に、田村は明治24年に行った三月蜜柑の調

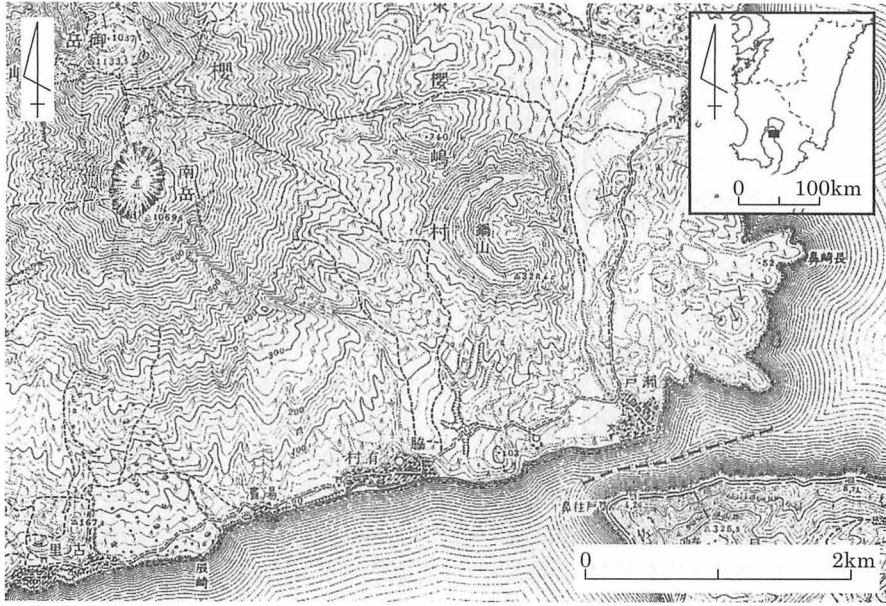


図4 有村温泉の概要

資料：1/50,000「鹿児島」(明治35(1902)年)をもとに作成。

査について、田村が記した「三月蜜柑」を用いて検討する<sup>27)</sup>。はじめに、田村が三月蜜柑に注目した経緯について、以下のように記されていた。

明治二十四年三月宮崎県の命を帯ひて鹿児島に赴きたりしとき同市山下町に有川矢九郎と云へる豪家ありて頗ふる柑橘を栽培せられしことを聞きたりしより一日全氏を山下町の邸に訪ひ其の樹園を周覧したりしに菓樹の種類は殆んどあらゆるはなき程の有様にして中々盛なる菓園なりしが中に就て最も余か奇柑と認めしものありしより有川老翁に尋ねしに翁笑ふて答へざりしが少焉ありて翁其の樹を指して三月蜜柑と云ひ該樹は原と桜島にありしが頗ふる奇品なりしより数十金を投して原木を茲に移したりと云ふ

明治24年、宮崎県農務課に勤務する田村は、「宮崎県の命」で鹿児島県を訪問した。「宮崎県の命」とは、田中の調査への同行と同じく、明治19(1886)年に引き続き宮崎県知事を在任していた岩山により、殖産興業政策の一環として宮崎県および周辺地域における将来有望な作物の調査が目的であったとみられる。その際、調査先として、

鹿児島市山下町の「豪家」である有川矢九郎の邸宅を訪問しており興味深い。

有川は、近世後期の薩摩藩士であり、船奉行や生産奉行等を務め、近代以降は海運業や鹿児島県庁生産会社掛に従事した<sup>28)</sup>。図3は、鹿児島市街および有川の邸宅を示したものである<sup>29)</sup>。図3より、有川の邸宅は、鹿児島市街東部の密集家屋で表現された旧町人地ではなく、市街西部の旧武家地に立地している。この地域は、家屋が多数立地しているものの密集していないことから、1戸当たりの敷地面積が町人地より広く、庭を所有していた様子がうかがえる。また、田村による有川への聞き取り調査によれば、三月蜜柑の原木は従来桜島にあり、有川が大金を投じて邸内の庭へ移植していた。つまり、三月蜜柑は、城下町の旧武家地に居住し、もと武士で海運業等に従事する富裕層が、趣味的な園芸の一環として栽培していた。

其後明治二十八年三月十五日鹿児島県知事は種子ヶ島糖業並に柑橘改良の爲め宮崎県知事に交渉して余の調査を請求せり余は鹿児島県の嘱託に依りて再び桜島に赴き多くの島民を集めて柑橘を講話をなしたりき干時本島東櫻島村字有村

は古来有名なる温泉場にして且つ三月蜜柑の原産地なりしことを聞き全月入浴を兼ね舟路有村に赴き竹内氏を訪問したりしに原木は尚邸内の一隅に存して高く空に聳へ樹幹の周囲壹尺七八寸根際より岐れて二又となり枝葉稠密宛然黒島蜜柑の如く年々結果豊産亦豊凶の別なしと云へり

有川家での調査において三月蜜柑の原木が桜島にあることを知った田村は、明治28(1895)年に桜島にて調査を行っている。前述のとおり、桜島は、近代以前より鹿児島県有数の柑橘産地であった。ただし、三月蜜柑の原木は「古来有名なる温泉場」の有村地区にある、竹内家の邸内で発見された。なお、有村温泉について、明治40(1907)年に刊行された『鹿児島県案内』には、「桜島の温泉場 有村、古里、黒神の三温泉場あり、就中有村を以て最も盛なりとす(中略)殊に南方に面して西南の定期風を受け眺望も亦佳なれば夏期の避暑には最も適当なる場所にて、海水浴も亦同時になすことを得べし」と記されていた<sup>30)</sup>。有村温泉は、大正3(1914)年の桜島大正大噴火により消滅したが、明治期以前は温泉保養地として避暑客等により隆盛していた(図4)。つまり、桜島は柑橘産地であるものの、三月蜜柑の原木は柑橘園ではなく、温泉地にある邸宅の庭にて栽培されていた。

#### IV. 結論

本稿は、近代日本の城下町にある武家の庭に注目し、そこで植栽された植物の特性を明らかにするとともに、農業の近代化において武家の庭で蓄積された知識や技術がいかに活用されたか、柑橘に注目し検討した。近代以降、明治政府の殖産興業政策により、各地で農業をはじめさまざまな産業振興が隆盛した。柑橘栽培においても、欧米産や中国・台湾産といった外来種の導入に加え、日本産の柑橘品種の調査が進められ、将来有望な品種の選択が進められた。日本では、近世より城下町の武家の庭において、趣味的な園芸の一環としてさまざまな柑橘品種が栽培されていた。近代以降、農務官僚等は城下町の武家の庭を訪問し、そ

こで栽培されているさまざまな柑橘品種の中から、殖産興業に有益なものを発見していった。つまり、本稿を通じて、近代以降の旧城下町にある武家の庭は、農業に関する知識や技術の集積する場所として、農務官僚をはじめ農業の近代化に従事する者に注目されていた。

本稿の成果は、あくまで近代の旧城下町における武家の庭が柑橘栽培という農業の近代化に果たした役割を明らかにした点にとどまっている。しかし、都市の庭が地域形成に果たした役割は、近代の旧城下町に顕著にみられるだけではない。たとえば、現代においても、都市化の進む地域では市街化調整区域をあえて設定し、畑地や緑地を保全するとともに、市民農園や公園として活用し、地域住民のコミュニティの構築が図られている。また、都市内部にある貧困層の集中する地区では、空き地やアパートのベランダ、鉄道用地等に畑地を作ることで小規模ながら野菜を自給自足し、生計を維持しようとする様子がみられる。都市にある緑地は、小規模ではあるが、地域住民の生活にとってさまざまな役割をもつ不可欠な存在である。今後の課題として、庭をはじめ都市にある小規模な緑地が、都市に居住する人々の生活様式や都市周辺の地域形成に果たす役割について、超域的、通時的な検討が必要である。

#### 注

- 1) 歴史地理学における近年の研究には、各地の近世城下町における空間構造を扱ったもの(①上島智史「近世対馬における城下町の空間構造」歴史地理学53-4, 2011, 19-37頁, ②石田 曜「近世明石における城下町プラン」歴史地理学52-5, 2010, 43-55頁)や、城下町絵図の資料論(③渡辺理絵「城下町絵図の研究視角—城下町研究と絵図研究の還流を目指して—」歴史地理学52-1, 2010, 69-83頁)、近代以降における城下町の軍都化を扱ったもの(④木本浩一「土地利用からみた都市『近代化』—変化と媒介—」歴史地理学53-1, 2011, 19-37頁)等がみられる。
- 2) 川名 禎「『町方以後留』にみる城下町津山の生活空間」国史学171, 2000, 117-148頁。
- 3) 前掲2)。

- 4) ①内田忠賢「怪談と場所—不思議空間の大都市・江戸—」国文学解釈と教材の研究 52-11, 2007, 56-63 頁, ②内田忠賢「江戸人の不思議の場所—その人文主義地理学的考察—」史林 73-6, 1990, 917-944 頁。
- 5) 野間晴雄「17～19世紀江戸・東京近郊の花き園芸の発達と空間的拡散—グローバル／ローカルな視点からの菊の歴史地理—」東アジア文化交渉研究 3, 2010, 395-431 頁。
- 6) 本稿では、庭の中にある植栽や畑地等を一括して、「庭」と表記する。
- 7) 城下町の邸内にある庭の実態については、建築学により景観復原が進められている(①中井将胤「津和野百景図」と城下町の庭園群の保護」月刊文化財 589, 2012, 21-24 頁, ②永松義博・日高英二「城下町秋月の町並み構成と庭園の特性に関する研究」南九州大学研究報告 自然科学編 38, 2008, 19-29 頁, 等)。
- 8) 金坂清則「土地利用・内部構造の変容」(豊田 武・原田伴彦・矢守一彦編『講座 日本の封建都市 第1巻』文一総合出版, 1982), 301-311 頁。
- 9) 小木新造「江戸から東京・東京へ」(豊田 武・原田伴彦・矢守一彦編『講座 日本の封建都市 第1巻』文一総合出版, 1982), 254-256 頁。
- 10) 花木宏直「近世後期～明治前期における柑橘品種と需要—和歌山市街及び周辺地域を事例に一」地理空間 3-2, 2010, 96-112 頁。
- 11) 野間晴雄「東洋の植物を求めて—植物園・プラントハンター・園芸家の文化交渉学—」東アジア文化交渉研究 別冊 4, 2009, 109-135 頁。
- 12) 清水克志「日本におけるキャベツ生産地域の成立とその背景としてのキャベツ食習慣の定着—明治後期から昭和戦前期を中心として—」地理学評論 81-1, 2008, 1-24 頁。
- 13) 資料は、主に以下のものを用いた。①塚口勇作編『静岡県柑橘史』静岡県柑橘販売農業協同組合連合会, 1959, ②村上節太郎『柑橘栽培地域の研究』松山印刷有限会社, 1967, ③果樹農業発達史編集委員会編『果樹農業発達史』農林統計協会, 1972。
- 14) ①新岡興文編・発行『淡路鳴門蜜柑栽培要略』, 1889, ②萩尾徳太郎『淡路鳴門蜜柑栽培録』藻文堂, 1893。
- 15) 下原町(下屋敷町)の比定には、以下の資料や文献も参考にした。①洲本市立図書館所蔵『洲本御城下絵図』洲本市立淡路文化史料館, 1988, ②平井松午「近世初期城下町の成立過程と町割計画図の意義—徳島藩洲本城下町の場合—」歴史地理学 51-1, 2009, 1-20 頁。
- 16) 前掲 13) ①, 99-104 頁。
- 17) 日本柑橘会編・発行『柑橘』, 1903～。なお、明治 37 (1904) 年には雑誌名を『果樹』へ変更し、柑橘にとどまらないさまざまな果樹に関する情報を掲載するようになった。大正 12 (1923) 年以降は、会の名称を中央園芸会、雑誌名を『中央園芸』に改め、昭和 30 (1955) 年まで活動を継続した。
- 18) 田村利親「天狗蜜柑の説」柑橘 8, 1907, 1-8 頁。
- 19) 田中の経歴については、以下のものをはじめ、さまざまな文献や伝記が作成されている。①村沢武夫『近代日本を築いた田中芳男と義廉』田中芳男・義廉顕彰会, 1978, ②みやじましげる編『田中芳男伝 なんじゃあもんじゃあ』田中芳男・義廉顕彰会, 1983, ③飯田市美術博物館編・発行『日本の博物館の父田中芳男展』, 2000。
- 20) 前掲 19) ②, 391 頁。
- 21) 宮崎県編・発行『宮崎県史 通史編 近・現代 1』, 2000, 417-418 頁。
- 22) ①友田清彦「内務省期の農政実務官僚と勸農政策の展開」農村研究 106, 2008, 1-12 頁。
- 23) 加治木郷土誌編さん委員会編・発行『加治木郷土誌』, 1992, 562 頁, および現地調査による。
- 24) 前掲 23), 243 頁。
- 25) 前掲 23), 238 頁。
- 26) 前掲 23), 231 頁, 239 頁。
- 27) 田村利親「三月蜜柑」柑橘 4, 1903, 5-6 頁。
- 28) 鹿児島県姓氏家系大辞典編纂委員会編『角川日本姓氏歴史人物大辞典 46 鹿児島県姓氏家系大辞典』角川書店, 1994, 321 頁。
- 29) 図の作成は、塩満郁夫・友野春久編『鹿児島城下絵図散歩—新たな発見に出会う』高城書房, 2004, および現地調査による。
- 30) 坂田長愛・加藤雄吉編『鹿児島県案内』篠原書肆, 1907, 86 頁。